

1986年度 文部省指定同和教育研究発表会公開授業

主 題 「人の世に熱あれ、人間に光あれ」
～日本の人権宣言「水平社宣言」から学んだこと～
資 料 「水平社宣言」(解説:佐藤文彦)

藍住中学校3年4組
1986年11月13日(木)
授業者 森口健司

授業者(森口)

1学期、丸岡忠雄さんの「ふるさと」「意識の芽ばえ」を通して、丸岡さんの苦しみや悲しみに触れて、部落問題にかかわる様々な生き方を学習してきました。2学期、水平社宣言を宣言の一つ一つの文章に様々な思いを込め、様々な資料を通して、宣言文を読んできました。宣言文が、みんなにとって何であったか。私にとって何であるのか。水平社宣言は、私たちに3つのことを教えてくれたと思います。

一つ目は、「同情融和の否定」です。このことについて皆さんは、いろいろな事実を通して、私に思いを返してくれました。それは、同情や憐れみでは、決して差別はなくなならないということでした。二つ目は、「人間を尊敬する」ということ。「人間とは崇高なものであり、元来、尊敬されるべきものである」ことを学びました。そして、三つ目は、「団結する」ということです。「団結こそ、弱い者が生き残っていく知恵である」ということを学びました。

今日は、この「水平社宣言」の本質に思いを馳せながら、みんなの思いや願い、一人一人の生き方、人間として「生きることの意味」を語ってほしいと思います。

生徒男子(TN)

水平社宣言は、部落の人たちの苦労や苦しみの中からつくったすばらしい文章だと思います。同情融和や、その他の政府の方針もだめで、部落の人たち自らの手で、部落の解放を願った水平社宣言は、部落の人たちが、僕たちや部落の人たちみんなのためにつくった宣言文だと思う。差別される部落の人たちも、差別する人のどちらも、すべての人間の幸福を願っているところがすばらしいと思います。僕は、水平社宣言を勉強して、部落の人たちのすばらしさを知りました。水平社宣言の怒り…。怒りの中に人間としてのすばらしさ、優しさがあると思います。部落の人の中には、人間としてのすばらしさがあると思います。それは、長い間、虐げられて、いじめられてきた中から生まれてきた人間らしさだと思います。宣言文にも、部落の生まれであることを誇りうる時がきたと書かれています。それは逆に、差別してきたみんなが、恥ずかしいと思うようにならないかならないし、すべての人間の幸福を願うには、差別する人が、自分のために差別するのをやめなければならないと思います。

授業者(森口)

優しさは怒りの中に培われる。TN君が、宣言に寄せる思いを今話してくれました。「人の世に熱あれ、人間に光あれ」部落の人間の幸せだけを願ったのではない。苦しみを背負ったからこそ、悲しみの中に生きたからこそ、すべての人間の幸せを願った。「水平社宣言」の思想、「水平社宣言」の真実から学んだみんなの思いをつなげていきましょう。

生徒女子(IY)

今日までに学んできた水平社宣言は、私にいろんなことを教えてくれました。人間としての生き方、そして人間としてもつべき真の心を…。今まで、人間は人間らしく生きてあたりまえとっていました。でも、今の私がはたして人間らしく生きているか、自分でもわかりません。多分、うわべだけの人間を演じている

だけだと思います。考え方だって、今の大人と同じで、実際、そんな気持ち全くないのに、内心思ってもないことをかっこよく言うてみたり、人と話を合わせたり、多数派の一員として行動していたんだと思います。でも、この水平社宣言を学び、今の私ではいけないと思いました。今の私は、差別されてきた人の一段も、二段も上に立って、ただ同情しているだけと思うのです。虐げられてきた人たちは、私なんかよりずっとずっとすばらしい心の持ち主です。真の心の持ち主です。私なんか、一生かかっても持つことのできないものを持っています。これから先、自分がどう生きるか、それはもちろん自分で決めることです。他人には関係ないことだから、でも、そのことがとても怖いのです。不安でたまりません。それは人間らしく生きていく自信がないからです。まだ時間はあります。私は、この水平社宣言を私の心の教科書として、じっくりと考えてみようと思います。今の私の課題は、まず、人を思いやることです。自分のことだけでなく、人の心まで大切にできる心を育てていきたいです。

授業者(森口)

「水平社宣言を私の心の教科書として…」この言葉を聞いた時に、胸がいっぱいになりました。みんなと宣言を勉強して、本当によかったと思いました。宣言の中から、「同情融和の否定」ということを学んできました。一段上に立って、かわいそうじゃ。気の毒じゃ。そういう同情や憐れみをたれることが、すでに、その人を一段下に見下して、押さえつけている姿であるということ、みんなはいろんな事実を通して感じてきました。自分の生きる課題として、「水平社宣言」を考えていきたいと思います。身近なことを通して、みんなの家でのことを通して語ってください。

生徒女子(HK)

この間、私は部落問題のことを家の人たちにいろいろ話しました。しばらくして、何やら話をしていました。こそこそ話だったので、よく聞こえませんでした。四本指をしていました。私は、その指をすぐにはわかりませんでした。しばらくして、部落だということに気がつきました。普段は優しいお父さんですが、この時ほど裏切られたような気持ちになったことはありませんでした。そして「同和教育は、しない方がよい。するから部落というものがあると、わかってしまう。しなければわからない」というのです。

しかし、現に親たちが、子どもに四本指を見せています。他の家も同じだろうと思います。知らず知らずのうちに、親から子、子から孫へと伝わっているんだと思います。だから今の時代でその親たちを変えなければならぬ。孫まで伝えてはいけない。悪い意識(差別意識)を持つ親たちを変えるために、私たちは、もっともっと同和教育をしなければならないと思うんです。私たちは、部落差別をなくすために、どれだけの人が苦勞し、どれだけの人の犠牲があったかを、自分の思いと一緒に、真実を知らない親たちに語っていく必要があると思うんです。

授業者(森口)

家族のことをたくさん人の前で、家族の本当に情けないことをくやしいことをたくさん人の前で話するのは、本当に勇気がいります。必ずわかってくれる。必ず人は変わる。お父さんは変わる。お母さんも変わる。そのことを信じて、話し続けていきたいです。

私は同和教育を本当の人間になるための、本当の教育だと思っています。同和教育反対を唱える人、これは少数でないと思います。人間としての生き方を考える教育がなくて、何で人の幸せが見えていくのだろうか。そのことを強くいつも思います。今日みんなの語りは、この教室に集まっていた多くの先生方の心に届いていくと思います。みんなの精一杯の思い、しっかりと語っていきましょう。

生徒男子(KM)

「知らないことほど怖いものはない」とよく言われますが、部落問題でも同じことがいえると思います。僕は、1年前まで私立の中学校にいたのですが、その中学校にいた2年間で、一度も部落問題の授業はあり

ませんでした。僕は、小学校の時、ほんの少しだけやったような気がします。はっきり言って、僕自身、無知無関心でした。歴史の中に出てくる形だけのことは知っていました。中学入学時にもらった教材の「わたしの願い」という本を私立の学校では、使ったことはありませんでしたが、自分で読んだことは度々ありました。そのなかに出てくる「部落」「えた、非人」「あっち」などの意味も知らずに、僕はただ可哀相だといういわゆる同情融和の考えしか持ちませんでした。まして、県庁や役場などにある「知ろうなくそう部落差別」などという垂れ幕にもなんの関心も持たなかったのも事実です。

しかし、あるきっかけで藍住中学校へ転校してきて中学3年になってから、詩「峠」から始まり丸岡さんの「ふるさと」や「意識の芽ばえ」を学んできました。そして、人間の本当の生き方を追求し、自分の心にある醜い心、自分以下を求める心の醜さ、同情融和の考え方の間違いなどを考えながら、水平社宣言を勉強してきました。そこで僕は、前の学校をけなすわけではないけど、本当の教育である同和教育をしない部落問題を学ぼうとしない学校は、ダメだと言いたいのです。今もその学校に友だちがたくさんいます。その友だちたちが、将来、真実を知らず、人の口伝えだけを信じて差別をし、また新しい差別を生んで、差別の根本を維持していくようになると思うのです。現在、このような学校が何校あるでしょうか。公立、私立の関係なく部落問題を学ぶのは、日本人の責務であると思います。

差別している人が一番みじめだということは、水平社宣言で学びました。全国水平社創立大会も歴史の一点としてではなく、これを人間の真実の姿としてとらえることが大切だと思います。何かすべて自分が、わかっているみたいな言い方になったけど、僕の人生はこれからです。これからいろいろな人と接していく中で、人間の真実がわかるようになることが、僕にとっての部落問題であって、水平社宣言だと思います。

授業者(森口)

このクラスには、素晴らしい仲間がいます。本当に素晴らしいと思います。ある子が先日こんな話をしてくれました。「先生なあ、授業を他の授業をしんどうなって、抜けたろかと思うことがあるんじゃないか…。」

「そやけど、ずうっと、ずうっと、道徳の時間だけは、抜きたいや抜けようや思うたことなかった。何でだろうか…。」と僕に話してくれました。道徳の時間、お前はようできる。お前はできんというような選別は一切しません。お前はわからん、お前はわかる。そういう選別もしません。みんなで生きることを求めていくということは、みんながこれから生きていく人生の中で大きな支えとなると思います。

こういう機会に巡り会えたみんなは、本当に幸せであると思います。仲間と共に、生きることを求めていく姿というのは、本当に尊い姿であると思います。そして、その中に、みんなの中に水平社宣言が、位置づけられてきました。水平社宣言にかかわって、みんなの思いをどんどんつないでいってください。

生徒男子(KT)

僕にとって水平社宣言は、人間の平等と、人の苦しみを自分もいっしょに感じる事だだと思います。そして、差別に対して、いっしょに闘っていくことだだと思います。これまで部落差別が、多くの人たちを死に追いやったことについて、心の底から悲しみと怒りを感じます。差別する人は、差別される人に一段上において「お前はかわいそうやのう」という人を見下した憐れみの心を持っています。その憐れみの気持ちには、腹がたってきます。「私は、決して差別はしていない…」と自分の姿に気づかずに言う人がいますが、そんな口先だけの人がいるからこそ、差別が生まれるのだと思います。そんな人は、全然差別の悲しみや苦しみを知らないと思います。だから、そんな人にこそ差別されてきた人の悲しみや怒りを知ってもらい、いっしょに怒りの涙を流してほしいと思います。そして、人間すべてが、悲しみや怒りを自分の身体に感じ、心の底から人に優しくなれたら、差別はなくなると思います。水平社宣言は、まさにその叫びだと思います。

授業者(森口)

家庭訪問の時を思い出します。KT君の家へ行った時、おばあちゃんが迎えてくれました。あの家庭訪問は、

今も昨日のここのように、私の心によみがえってきます。決して忘れることはありません。おばあちゃんの優しい言葉が、今も僕の胸に響いています。E君の胸の中にも、いつも響いていると思います。

E君が、学校へ行く時に、足が不自由で歩きにくいけど、一生懸命玄関まで出て行って「今日も気をつけていきなよ…」と言って、手を合わせて見送るんですと、おばあちゃんは、最高の笑顔で僕に話してくれました。なんてすばらしいんだろうと思いました。おばあちゃんのE君への思いや願い、人間の本当の幸せはここにあるんだと思いました。

生徒女子(YO)

私にとって水平社宣言は、私をいつも勇気づけてくれ、励ましてくれるものです。たとえば、どんな時にかと言うと、苦しくて、いろいろなことで、とてもつらい思いになった時、水平社宣言をよく思い出すことがあります。全部はとても覚えてないけど、宣言文が少しづつ腹立ちや苦しさを消してくれて、反対に「なんだこのくらいのこと…」と思うことがあります。それと、もう一つ、私にとって宣言文は、差別を卑しく、人間の恥だと思わせてくれるものです。

授業者(森口)

YOさんの中に、宣言文が生きている。そのことが本当にうれしい。みんなの中に宣言文の一つ一つの言葉が心の中に生きて、皆さん自身を励ましてくれる。勇気づけてくれる。「頑張らな…」と思い、「卑しい生き方はせんぞ…」。「人に魂を売るような愚かな生き方はせんぞ…」という決意をもって、自分をみつめていく。そんな宣言文であってほしいと思います。水平社宣言を学んでいく中で今まで見えなかったものが見えてくる。今までわからなかったことがわかってくる。そんな思いになったということ、みんなからいっぱい聞きました。今まで何気なく生きてきた。何気なく過ごしてきたことが「ああ、いかなんだ」と思えてくる。そういう自分と出会った時に、みんなは見事に成長していくんです。

生徒女子(YM)

部落問題を真剣に考えるようになって、だんだんと本当のことを知るようになりました。そして、今までの間違った自分を見つけていく中で、人間として、これからどんな生き方をしていくかということをも自分自身に問いかけてみました。今、思い出してみると、過去の私は、腹の立つ考えばかり持っていました。友達に対しても軽々しい言葉で、平気で相手の心に傷をつけてきました。学校からの帰り、みんなから外されて、いつも一人で帰る子がいました。その子は、一人ぼっちになると決まって、私たちの方へ石を投げてきたり、私たちのランドセルを引っ張ったりして、いやがらせばかりしていました。その時の私は、一人ぼっちの子がすることをただのいやがらせとしか受け取っていませんでした。でも、今考えてみると、それは一人でいる悲しさやさみしさや自分の存在を行動によって訴えていたんだと思います。なのに、私は、その上からまた押さえつけるようなことをしました。大勢対一人でベラベラと文句を言ったりして、まるで、大人が子どもにお説教するような高慢な態度を取っていたのです。思いやりの言葉は、ひとかけらもありませんでした。一人ぼっちの子に味方すると、みんなから仲間外れにされるという思いが、一番にあったからだと思います。そして、今、間違ったことがあっても、大勢なら正しいも同じ、みたいな考えを持っていた過去の弱い自分が見えてきました。

授業者(森口)

今まで見えなかったものが見えてくる。今までそう思っていたことがやっぱり違うかったということが見えてくる。宣言によって、そのことが見えてきた。それが人間として生きる喜びです。

生徒女子(NU)

先生が授業の中で「人のために」という言葉が、一番好かんと言った時、私はドキッとしました。私は、小さい時から「将来何になりたいん？」と尋ねられた時、きまって「人のためになる仕事がしたい」とか

「身体の不自由な人のためになる仕事がしたい」などと言ってきたからです。今まで、よいと思ってきたことが、人を上から下に見ていることなんて…、何てことだろう！「人間が生きる」ということは、「共に生きる」ことだったんだと思い知らされました。本当に、今私は、自分に歯がゆい気持ちでいっぱいです。私の15年の歴史を振り返ると、たくさんの差別の跡がありました。母さんが、交通事故にあって、ガードレールに当たった時、みんなが「あっちの人の塀でなくてよかったなあ…」とか「あっちの人やったら、団体できて、ごっついお金、絞られるで…」などと話しているのを聞いて、私も本当にそうだと思ってきました。また、家族でドライブに行った時なんか、前からあのへんは、あっちの人が多いけんああと聞いていたせいか、他と違う目でそのへんを見たこともありました。そうした意識した目を見てきた私は、まさに差別の中を生き、差別してきたのです。3年になって、水平社宣言をもとに様々な部落差別の真実に触れて、やっと私は、過去の私がしてきた差別が見えてきたような気がします。また、周りの大人たちの言った差別の一つ一つが、間違っていたとはっきりわかりました。でも、その15年間をきれいさっぱり洗い流すことはしたくありません。差別してきた自分への歯がゆさ、罪の意識を、差別は絶対に許さないという怒りに変えて持ち続けていきたいです。

授業者(森口)

差別しないのではなく、差別ができない人間にならないといけないんです。「差別は絶対に許さない」という人間にならないといけないんです。人は言います。「私は差別しません」と…。しないんでないんです。できないようにならないといかんのです。人間として、差別という、人を虐げることは絶対にできない。そんな心をつくっていかないといけないんです。それが、悲しみが見えるということです。悲しみがわかるということです。

生徒女子(田井中)

自分と部落問題は、あまり関係のない、どこか遠くのこのように思っていました。だから、まさか自分が人を傷つけているなんて思ってもしませんでした。しかし、私は知らず知らずのうちに人を傷つけていました。そのことに気づくことがなかなかできませんでした。それは部落問題を自分にかかわる問題として、真剣にとらえていなかったからだと思います。そんな自分の愚かさに気づいた時、情けない気持ちと共に、自分に対する腹立たしさがこみ上げてきました。他人の苦しみをわかろうとしない人が、たくさんの人たちを苦しめ、傷つけてきたのだと思います。自分が苦しくないから、自分が傷つけた相手の傷口が見えず、苦しめていることに気づかなかったんだと思います。そして、本当の自分の姿が見えないから、自分で自分を傷つけていることに気づかなかったんだと思います。私もそんな人間だったと思います。表だけ、人間の格好をしているだけで、本当の人間らしい心を持っていなかったと思います。人間には、心があるから素晴らしいと思います。他人の痛みや苦しみが、自分のものと思えるような、本当の中身のある心を持つ人間になりたいと思います。

授業者(森口)

差別がわかるということは、自分が傷つけた相手の傷、相手の傷の痛みが、自分の胸の痛みとなることです。そこを部落だと誰が決めているのだろうか。その人を部落だと誰が決めているのだろうか。部落であるという歴史はないんです。差別を受けてきた歴史はあるけれど…。その人間が部落であるという歴史はないんです。そこにあるのは、差別を受けてきた、虐げの中を生きてきた歴史だけです。部落だと、相手に対して、その特定の場所に対して、部落だと見ていくこと、そのことが差別なんです。自分が相手を傷つけてきたその傷に気づく。その傷の痛みが、自分の胸の痛みとなった時に、その人の心の中には、差別は許さない、差別はできないという思いが育っていきます。いろいろな思いが、みんなの中に「水平社宣言」を通して浮かんでいきます。これが人間の生き方を学ぶ授業なんです。

生徒女子(Y.N)

水平社宣言を勉強していく中で、本当に何か大きいものを得たような気がします。自分への恥ずかしさをたくさん感じました。自分以下を求めること。それは人間としてとても恥ずかしいことです。自分以下を求めることによって、自分が一段上に立ち、差別というものを生んでいきます。自分が精一杯生きることは、自分以下を求める心をなくすことだと思います。私も今まで差別してきた部分がたくさんありました。そのことをよく振り返って、自分以下を求めるのではなく、底知れぬ悲しみを持った人たちと、共に歩もうとする人間になりたいです。水平社宣言が、これから私が生きていく上で、私のつらいときの心の支えとなると思います。いつも心の中で、私に、私自身に、生きることを訴えてくれるものだと思います。

授業者(森口)

「自分以下を求める心」この言葉は、みんなの中にも、私の中にも、鋭く突き刺さった言葉ですね。私自身の生き方の中でも、深く考えさせられた言葉です。

生徒男子(MY)

前に僕が見た映画で、どんな題だったか覚えてないけど、博打(ばくち)をしている場面がありました。その場面の中で、韓国人か、朝鮮人かはわからないけど、その人が博打(ばくち)に勝って「やった。やった。」と喜んでいました。すると、その相手の人が「朝鮮人が何をうるさめに言よるんな」と馬鹿にしたように言いました。その時、その映画の主人公の人が、「朝鮮人も、日本人も、同じ人間でないか」という言葉を言いました。その言葉はすごいと思いました。人間は、自分より下の人がいると安心すると学んだけど、僕も、テストの点数が返ってきて、とても悪い成績で、親に怒られた時「まだ、僕より点数の低い人いる」と言って怒られたこともありました。この気持ちは差別につながる意識だと思います。そんなところも、小さいことだけど直していかなければならないと思います。

授業者(森口)

みんなに言いました。「競争の原理と連帯の原理をみんなで統一していこう」と…。決して、成績はよくなっていない。しかし、順番がよくなった。それで安心していく。そんな愚かな思いは捨てていこう。ここに集うたクラスメート42人が、みんなでよくなるろう。みんなでよくなる競争をしよう。みんなで支え合って、みんなでよくなっていく。みんなで伸びていく。そんな競争をしていこう。

「高校入試は団体戦」です。みんなが一つになって、みんなが支え合って、みんなで頑張っていこうとする連帯の思想がなければ、連帯の考えがなければ、みんなはバラバラになっていきます。そのことを今、K君が言ってくれたです。自分以下がほしい、自分以下を求めてきた自分に気づいていく。その中で、いろいろなものが見えてきます。皆さんが、初めて経験する高校入試という試練も、「高校入試は団体戦」を合言葉に、競争と連帯の原理をみんなで統一しながら、見事に乗り越えていきましょう。

生徒女子(SM)

小さい頃、私はどちらかと言うと「いじめられっ子」でした。幼稚園の年長組の時、私は藍住に引っ越してきました。前の幼稚園ではみんな仲よく遊んでいたけど、藍住の幼稚園ではどうもなじめずいつも一人でした。小学校に入っても友達はできず、数人の女の子にいじめられてきました。でも、クラスに一人、私とよく似た「いじめられっ子」がいました。その子は、私よりもっとひどいことをされていました。でも、私はその子を見て「ああ、よかった。私よりつらい子はまだいるんだ」ということを思い、その子がいじめられることで私は、ほっとした気持ちになっていました。私は今、そんな気持ちを持った自分がとても恥ずかしく、それ以上につらい思いでいっぱいです。自分に何かできなかったのか、何もしなかった自分が、今とても情けないです。私はその子に一生謝っても許してもらえないことをしてしまったと思います。その子に対して私は何もしていないけど、私の心の中に大きな傷ができてしまいました。自分以下がほしかったあま

りに…。私は今、一步一步前進しています。これからの私は、宣言文を通して立派な人間として生きられるように頑張ります。そのために一日一日を精一杯生き抜きます。

授業者(森口)

誰でも、いじめられるのはつらいです。一人になるのはつらいです。苦しいから、つらいから、自分がいじめられまいとして他の人をいじめてきた。それがつらい。情けない。そのことがわかってきた。そのことがわかった。自分を守ろうとして、他の人がいじめられるのを逆に喜んできた。そんなかつての自分が見えてきた。何でその時に、競争だけでなく、競り合うだけでなく、そういうふうに見ていくだけでなく、どうしてその子と連帯していけなかったんだろうか。その子と力を合わせていけなかったんだろうか。今、そんなことが見えてきた。「自分以下を求める」ということは、本当にあさましい姿であると思います。また、生活ノートの中に、こんなことも書いてくれたです。「自分以下なんて存在しない。もし仮に、自分以下がそこにあるとしたら、それは昔の自分だ。過去の自分だ」と書いてくれたです。

人は、いつも大勢の中で生きることを求めます。それが正しくないとわかっていても、大勢の中でいたら「それでいいわ、いいわ」と思っています。しかし、水平社宣言は違う。少数であったけれど、人間の真実を貫いてきた。虐げられたものこそ、深く人間を愛することを知る。いじめられてきたからこそ、深く人間を尊敬することを知る。人間の中にある真実を学んできました。人間の本当の強さ、人間の本当の優しさ、私たち一人一人に問われている生き方をみんなと求め続けていきたいと思っています。

生徒女子(YM)

私にとって、部落問題というのは、人間の強さや弱さを知ることです。大勢の中にいる人たちは、強そうに見えます。少数の中にいる人たちは、か弱そうに見えます。でも、外見でなく、一人一人の心の中はどうでしょう。大勢の中にいる人たちは、自分一人の意志では何もすることができず、人の目を気にしてばかりの弱い心の持ち主だと思います。本当の強さというのは、どういうことをいうのでしょうか。ただ、人数が多いだけ、声大きいだけ、力が強いだけ…。このような外見だけの強さでしょうか。そんな考えは間違っています。自分自身こうでありたい、こう生きていきたいと願う心は、みんな持っています。でも、この素直な心を崩していこうとする圧力があります。「その圧力にどこまで抵抗できるか」ということが強い人間になるか、弱い人間になるかの別れ道だと思います。でも、今の世の中は、どんな場合でも、少数意見より多数意見の方が、正しく見られるように思います。だから、多数意見の方だけが、重視されるのではなくて、少数意見はいつも重視されなければならないと思うのです。私は、大勢の中の一人ではなくて、いつも少数の中の一人でいたいです。

授業者(森口)

水平社宣言が、少数の中にある真実を私たちに教えてくれました。大勢でいたら、みんなと行動したら、それが間違いであっても、心のどこかで安心して大勢の方へついていく。そんな情けない人間にはなりたくないと思います。私の好きな言葉があります。いつも心の中で響いている言葉があります。「100人で歩こうって歩き出して歩き始めたら、99人が走り出して1人になっても歩き続ける。そんな人間でありたい…。」私はこの言葉を心の支えとして、みんなと共に生きることを求めてきました。また、部落問題を通して人間の生き方を考えてきました。そんな営みを今も、またこれからもみんなと共に、生命ある限り続けていきます。

私は、この藍住中学校で本当にすばらしい先生方と出会うことができました。そして、私にいっぱい力をくれた皆さんと出会うことができました。皆さんと築き上げてきた教育の喜び、この教育の営みを私が、また違う学校でやろうとした時、その学校で出会った先生方が、いっしょにやってくれるだろうか。そんな気持ちになることがあります。でも、この思いや願いは必ず伝わると信じて、私は一人になって

も、ひたむきに誠実に歩き続けようと思います。

皆さん、私が教師になろうと思った一番のスタートが、このこと(部落問題を解決すること)だったです。私の思いを真っ直ぐに受け止めてくれた皆さんを、私は心の底から尊敬しています。どんな困難に出会おうとも、皆さんと歩いた日々を心の糧として、もし一人になっても、一人になったから負けないという思いを大切に生きていきたい。いつも心の中は、そんな熱い思いに溢れています。

みんなの中には部落問題を通して、本当に人間を大切にすることが、どういうことであるかということが、今、育っています。そんなみんなの輝きが、みんなの生活ノートの中にいっぱい出てきます。なんて清らかな心が持てるのだろうか、なんてすばらしいのだろうか、いつも思います。本当にすばらしいです。

学校へ来る時、吉野川の流れをながめながら来ています。毎朝、吉野川の流れの中にみんなの顔が浮かびます。「今日も学校でみんなの生活ノートが読めるなあ」と思ったらうれしくなってきます。「今日も頑張るぞ」と力がわいてきます。それは部落問題の学習を通して、人間の生き方を考えるという教育の営みがあって、みんなの中に人を愛する、人間を認めていく心が育っていて、人間の温もりをいつも感じていて、自分を励まし、そして、私を励ましてくれて、本当にありがたい。ありがとうという気持ちでいっぱいです。

生徒女子(AA)

この前、学校の帰りに、田んぼで仕事をしているおばさんがいました。知らない人だけど、目があってので挨拶をしました。私が挨拶をすると、おばさんにもっこり笑って挨拶を私にしてくれました。そのおばさんの笑顔が私の心の中に飛び込んできました。本当に清々しい気持ちになりました。つくった笑顔じゃなくて、素朴というか何と言っていいかわからないけど…。とにかく胸がいっぱいになりました。ああ、よかったと思いました。なんかすごく幸福な気分になりました。言葉をかかわなくても、気持ちが伝わるんだなあと思いました。

授業者(森口)

知っている人ではないんです。一生懸命汗を流して働いている人を見た時、心が穏やかになって、目と目が合ったとき頭を下げた。すると仕事をしているおばさんも頭を下げてくれた。その挨拶により心が温かくなった。心が安らかになった。本当に清々しい気持ちになった。私もその生活ノートを読んだとき心が和みました。

生徒女子(KS)

この間、母と徳島市内を歩いていると、足の不自由な人が頭を下げて座っていました。横に松葉杖が置いてあり、前には小さな箱が置いてありました。箱の中には、100円玉や10円玉が少しはありました。私は「少しですけど」と言って、自分のお小遣いの中から50円玉を入れてあげました。その人は深々と頭を下げてくれました。母は「そんなんせいでいいよ」と小さい声で言いました。でも、私は自分の今の幸せを分けてあげられたという実感があつたし、勇気が出せたということに喜びを感じました。帰るときもその人の前を通りました。5メートルぐらい手前するとき、一人の老人が男の人の前に座り、お金を箱じゃなく、その人の手に直接渡していました。私もあの老人のように箱に入れるのではなく、その人の手に直接渡して上げれば、少しのお金でももっともっと幸せを分けてあげられたと思いました。この街にも、あんな人がいるんだなあと思うと嬉しくなります。また、そんな人でありたいという気持ちが、私の心に渦を巻いています。

授業者(森口)

直接に「少しですけど」と渡してあげたらよかったなあと思う。この思いは「ために」ではなく「共に」生きようとする姿です。すばらしいと思います。

生徒女子(NH)

部落差別は、私には遠いことのように思っていました。でも、遠いこと、関係ないこと、そんなことは絶

対にないんです。なぜなら、差別は自分自身がつくっているものだからです。私は、南沢恵美子さん、中島一子さんの「死の前の手紙」を聞いたとき、本当の優しさが何であるかを知りました。それは、恥ずかしいことですが、私は同情することが優しさであると思い込んでいたからです。「人間に光あれ」の同情融和運動の話を学ぶまでは、そうだったような気がします。そして、あの手紙を学んだとき、はっきりと優しさがわかりました。どうして、あんなに優しくなれるのだろうかと思うと同時に、そんな優しさの持ち主にあこがれます。私は、恵まれ過ぎて少しのことでも、恨みつらみをすぐ口にしてしまいます。今、私はそのことを恥じています。弱い人間だったと思います。本当にあの手紙は何とも言えません。私は生きることを学ぶ中で本当に優しく強い人間になりたいです。

授業者(森口)

どうしてそんなに優しくなれるのだろうか。どうしてこんなに優しいのだろうか。自分の生命を奪った、自分を虐げた人に対して、差別は憎んでもその人を憎んでいない。その優しさに、触れたとき、胸がいっぱいになりました。全体会の練習で「手紙」の歌を歌った時に涙を流しているみんなを見たとき、優しいということが、優しさということが、みんなの中に重く入っていったんだということを強く感じました。

生徒女子(TT)

私は、水平社宣言を勉強してきて、優しさというものが見えてきたように思います。今までの私は、優しさとは、ただ親切にすることだけと思っていました。でも、水平社宣言を勉強して、困難を乗り越える勇気、人と人との間を隔てる垣根を取り除く力、人の痛みがわかること、差別に対する怒り、そして、人間らしい生き方を選び出す力が、本当の優しさだとわかりました。水平社宣言に出会って、自分自身が一番変わってきたと思います。以前の私は、差別されてきた人たちの痛み、苦しみ、悲しみをわかったことはありませんでした。でも、水平社宣言を勉強してきて、差別の苦しみ、悲しみがわかってきたと思います。私は、人間として、人の苦しみが自分の苦しみとなってわかる生き方がしたいです。

生徒女子(NU)

私は、先生が話してくれたある部落の青年の言葉「私が幸せになって、悲しむ人ができるのなら、部落差別はなくならなくていい…」この言葉を聞いたとき、信じられない思いになりました。人間の真の優しさを見たような気がしました。また、中島一子さん、南沢恵美子さん、佳代さんの手紙もそうです。手紙の中に「差別がにくい」とはあったが、決して人を自分を虐げた人を恨んでいない姿に、目が醒めるような思いがしました。どうして、こんなに優しくなれるのだろうかと思いました。そして、今まで、虐げの中に、苦しみの中に、生き続けた人たちだからこそ持つ、持てる優しさなんだということがわかりました。私は、心の底からくる人としての優しさを持っていなかったと思います。いつも何かあると、人を恨んで自分を納得させてきました。部落差別の学習を通して、真の優しさと教育の本当の意味がわかってきました。

授業者(森口)

最初の話ですけど、前に話しました。ある部落問題の研究会で、講師の先生が「部落差別がなくなっても、人間はまた違う知恵で、また違う差別をつくり出すでしょう。」と話したとき、部落の青年が立ち上がって言った。「自分たちが味わってきた苦しみを他の人も味わうんだったら、部落差別はなくならなくていい。こんな悲しみを味わう人がおっはならんのです。」と必死に訴えた。泣きながら訴えた。この訴えの中にある人間の真実、人間として生きる意味を共に考えていきたいと思うんです。

生徒女子(EA)

私は、水平社宣言を通して、同情融和の考え方を学んで、いろいろと考えてみると、私も、同情だけをしてきたように思えてきました。今まで、資料や映画を見てきても、「かわいそうに」という思いしかありませんでした。それが、怒りになったことはなかったのです。かわいそうにということは、やっぱり自分を一

段上においていった言葉だから、いつまでたっても、部落の人々の本当の痛みや苦しみをわからないし、一歩も部落差別をなくしていくためには、進んでいかないことが、私なりにわかってきたように思います。いつか、私に部落問題がぶつかってきた時、私は苦しんでいる人々と共に並んで闘っていきたいです。そして、私が部落の人と親しい仲になり、結婚するようになって、親や周りの人が反対したとしても、絶対に結婚をやめるようなことはしません。絶対結婚します。そして、私の子どもが部落の人と結婚すると言ったら、私は何のこだわりもなく、「幸せになりなさい」と言えると思います。たとえ、誰が反対しても、私は味方になってあげます。私はこれからの人生ずっとこの気持ちで生きていきます。

授業者(森口)

EAさんの中にも、みんなの中にも、新たな決意が生まれています。人間の幸せはどこにあるのだろうか。それは私たちの心の中にあるんだと思うんです。私たちは私たち自身が幸せになるために部落問題を学んできたんだと思います。仲間の思いしっかりと心に刻んでいきましょう。

生徒男子(MN)

僕が、小学校5年のときだったと思います。友達と一緒に遊んでいたとき、中学生の友達が、〇〇のところにいこうかいいぞとか、〇〇のやつは怖いぞなどと言っているのを聞いたことがありました。僕はどうして怖いのか、そこへ行ったらどうして悪いのか、わからないまま、いつのまにか僕もそんな思いを持つようになってきました。これはいったい何でしょうか。これが差別なんです。僕は、そこがどんなところかもわからないのに、そこに住んでいる人を差別してきたのです。そこに住んでいる人は、とても優しい人たちなのに、自分はなにも知らないで、人から聞いただけで、そこに住む人は怖いと、近づかない方がいいと思ってきたのです。水平社宣言を学んでそのことに気がつきました。僕は、差別というものの本質が何もわかっていなかったのです。今、そんな自分に歯がゆさと怒りを感じます。過去のことにはこだわらず、未来のことにくよくよせず、今を大切に生きることが大切だと学びました。これからの僕に問われているのは、自分が差別したことに気づき、これからどのように生きていくかということだと思います。人間だれしも弱い心は持っていますが、僕の心の奥にある差別と闘い、差別という名の壁を破ったとき、本当の自分が見えてくると思います。部落差別やいろいろな差別(の学習)は、僕にとって真の人間になるための心の峠です。「人間、憐れんではいけない。踏みつけてもいけない。人間は尊敬されるべきものである」と言ったゴーリキの「どん底」や「手紙」が、とても心に残っています。「手紙」の歌詞の「悔やんではない。別れても…」この詩はどうしてと思います。歌っていたら心から涙が出そうになり、体が震えてきます。心から好きになった二人がどうして別れなければならないのかと思います。「起きよ光を放て」の中にもあったけど、決して悲しみの涙は流しません。しかし、怒りの涙は流したい。社会に出ても、人を尊敬する心、怒りの涙はからさずに持ち続け、友と一緒に困難を乗り越えていきたいです。

授業者(森口)

今日のみんなの言葉の一つ一つが、私のうちにあるものを奮い立たせてくれました。胸がいっぱいです。今日、私の心にも、みんなの心にも、一つの灯が、一つの灯が、ともっていったと思います。みんなの心の中に、私の心の中にもともった一つの灯を大切にしていきたい。その灯は何か。それは部落解放のともしび。部落解放の灯です。部落解放の灯というのは、人間解放の灯です。人間が人間として生きるための灯です。その灯は、どんなことがあっても消えない。何があっても消えない。どんな障害に出くわしても消えることがない。ここにともった42人の灯が、42人のともしびが、みんなが別れていっても消えることなく、まただれかに受け継がれていって、その灯が広がっていくことを心から信じています。願っています。一つ一つの灯を大切に、心にともった灯を大切に、これから生きていきたいと思います。今日は、ありがとう。